

〈特 集〉

アジアのツーリズム空間の生成過程と  
トランスナショナルな人の移動  
—序 言—

藤巻 正己\*

この特集は、「立命館大学2009年度 研究推進プログラム（基盤研究）」に採択された研究プロジェクト（研究課題「アジアのツーリズム空間の生成過程とトランスナショナルな人の移動に関する学際的総合的研究」）を契機として、立命館大学人文科学研究所内に立ち上げられた「グローバル化とアジアの観光」研究会による2011年度の研究成果の一部である<sup>1)</sup>。

これまでも本研究プロジェクトは、『立命館大学人文科学研究所紀要』No.95（2010年3月）において「東南アジアの経済振興・ツーリズム」（論考4編）、また *Ritsumeikan Journal of Social Sciences and Humanities*, Vol. 2（March, 2010）では *Tourism in Asia: Trends and Challenges*（論考8編）、さらに Vol. 3（March, 2011）でも *Progress of and Challenges in Tourism Studies: A Comparative Study on Asian Countries*（論考8編）と題する特集を組み、内外に向けてその研究成果を発信してきたが、今回は、あらためて当初の研究課題をテーマに掲げての特集となった。

さて本研究プロジェクトの研究課題は、次のような時代背景とそれにかかわる問題意識のもとに設定されたものである。すなわち、1990年代以降、国際ツーリズムと国際労働力移動の同時展開に伴い、アジアにおいてツーリズム空間の拡大、トランスナショナルなツーリストや労働者の移動が急増、拡大するようになった。こうした現象はローカルな空間の再編成や土地や環境

---

\*立命館大学文学部教授

をめぐる諸問題を引き起こしただけでなく、外国人観光客と外国人労働者を受入れる国々の政治経済・社会文化に対してもさまざまな影響を及ぼし、インフローする外国人（ゲスト）と地元社会住民（ホスト）との間における異文化接触を通じた「緊張／せめぎあい／対立」などの諸現象・問題を派生させた（図1）。

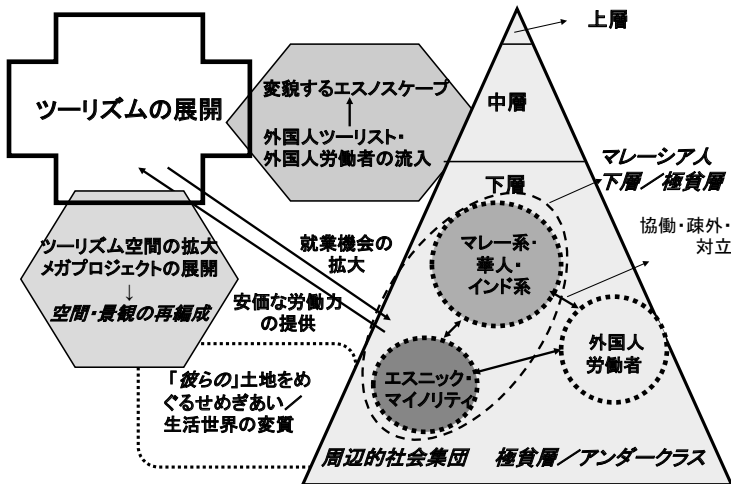


図1 ツーリズムの展開に伴う空間・景観・社会変容に関する概念図（半島部マレーシアの場合）

こうした動向に対して、本研究プロジェクトでは、①アジア諸地域において、いつ頃から／いかなるアクター（複数形）によって／どのような企図（複数形）のもと／どのようにツーリズム空間が開発・生成されていったのか、②その過程においてツーリズム空間生成の「場」はどのような政治社会的問題を経験するに至ったのか、たとえばエスノスケープ（*ethnoscape*）<sup>2)</sup>の変貌という観点から、ツーリズムの現場においてツーリズム産業を支える地元民と外国人労働者、そして外国人観光客という三者間の関係性や、ツーリズムの現場の風景（ツーリズムスケープ：*tourismscape*）<sup>3)</sup>から何が読み

取れるのか(図2)、といったテーマを設定し、プロジェクト・メンバーそれぞれの関心領域に引きつけて探究してきた。

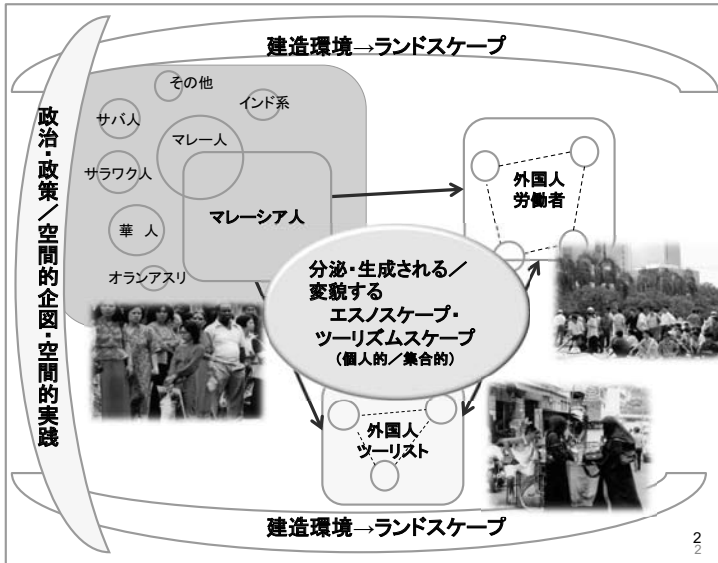


図2 ツーリズムの現場におけるエスノスケープ・ツーリズムスケープ  
(イメージ図：マレーシア・クアラルンプルの場合)

こうした研究枠組みのなかで、これまで本研究プロジェクトがとくに関心を払ってきたのがコミュニティ・ベースのツーリズム (Community-Based-Tourism : CBT) に関する研究である。CBT は、これまでの環境破壊や歴史文化の荒廃、ローカルの住民 (ホスト) と観光客 (ゲスト) との間の文化摩擦などさまざまな問題を引き起こし、ツーリズムの現場となる地元社会や地元民を疎外してきたツーリズム産業主導のマストツーリズムに対抗するオルタナティブなツーリズムの一つである。とくに、観光目的地のコミュニティの主体的な取り組みをベースに、地元住民と観光客との倫理的交流、自然環境との共生観にもとづいた伝統的生活文化を体験するホームステイ・

プログラムを取り込んだCBTが注目されつつある。それが、当該コミュニティの持続的かつ経済社会的自立や振興を促す契機となるだけでなく、地球社会における21世紀的諸課題克服のための有効なツールとしてみなされるからにはほかならない。ここでいう地球社会における21世紀的諸課題とは、環境問題や貧困問題の解消、先住民族などエスニックマイノリティの人間の尊厳の回復・自立（エンパワメント）、いいかえれば自然と人間、民族、歴史文化など、さまざまな次元での「共生社会」・「持続可能な社会」・「倫理的社会」の構築をめぐるテーマを指す（図3）。先述のように、「貧困と観光」をテーマにしてきた前プロジェクトの研究課題<sup>4)</sup>を継承する本研究プロジェクトでは、「アジアのツーリズム空間の生成過程とトランスナショナルな人の移動」という研究課題との文脈において、CBTのアジアにおける実践例の検証を進めているところである。

さて、本特集は以下の6編の論考から成る。まず、生田真人による「東南

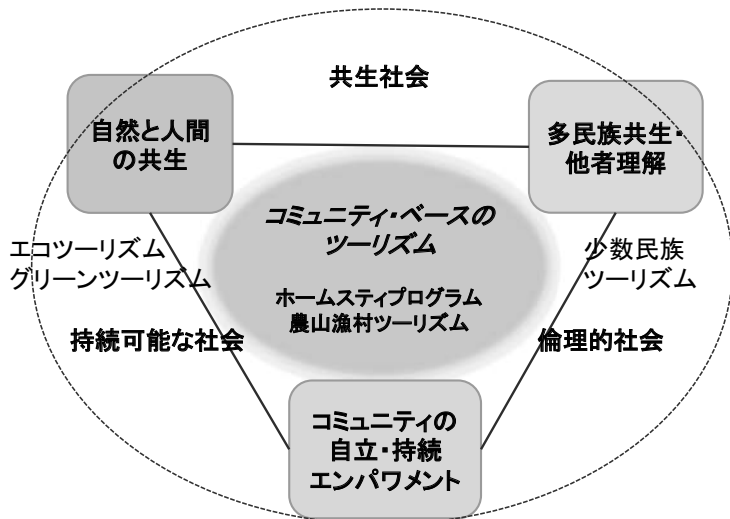


図3 21世紀の地球社会における諸課題とコミュニティ・ベースのツーリズムとの関係性

アジアの観光開発—タイとインドネシアの4地方都市を事例に—」は、世界的にみてもアジア観光の最初期から国際（マス）ツーリズムの目的地として世界地図に刻印されてきたタイとインドネシアの地方4都市・地域（プーケット、チェンマイ、ジョクジャカルタ、バリ島）がどのようにツーリズム空間として生産されてきたのかを、経済地理学の観点から地誌的記述を試みたものである。

次いで、井澤友美「サステイナブル・ツーリズムの実践と課題—インドネシア・バリ州の事例—」、江口信清「コミュニティ・ベイスト・ツーリズムとしてのホームステイ事業—マレーシア・サバ州クダサンの事例から—」、四本幸夫「観光が注目される農村の社会的変化—フィリピン・イフガオ州キアンガン町ナガカダン村を事例にして—」の3編は、既述のような問題意識にもとづき、インドネシア、マレーシア、フィリピンにおけるCBTの取組みについて、社会学および文化人類学の視点からアプローチした研究報告である。

最後に、薬師寺浩之「バックパッカー観光客の責任ある観光行動に対する認識と自己評価—タイ・チェンマイでのインタビュー調査結果から—」と大野哲也「標準化する『放浪』—ネパール・カトマンズにおける日本人宿の形成過程から—」の論考では、バックパッカー固有のツーリズム空間の生成過程、バックパッカーという観光者の生態、彼らのツーリズムの現場における身ぶり、ふるまいをめぐる問題、そして彼らとホスト社会会員とのかかわりの中で分沁・生成される多声的ツーリズムスケープが描出されている。

なお、人文科学研究所より別に刊行される英文ジャーナル *Ritsumeikan Journal of Social Sciences and Humanities*, Vol.4, March, 2012においても、「グローバル化とアジアの観光」研究プロジェクトにかかわる次の3編の論考が所収されている。Niti Wirudchawong: Policy on Community Tourism Development in Thailand は、研究プロジェクト集会（2012年1月28日・立命館大学衣笠キャンパス）でのスピーチ原稿をもとに寄稿されたものである。

同論考では、観光立国タイにおいて近年、国策的にCBT重視のプロジェクトが推進されるようになった経緯と政策の展開過程が紹介されている。Yamamoto Yuji: Preliminary Research on Nepalese Immigrant Workers in Penang; Gurkha Veterans' Connection for Oversea Nepalese Workers は、推定で250万人もの外国人労働者を受け入れているマレーシアのペナンで就労しているネパール人出稼ぎ者に対して行ったインタビューをもとに、彼らのペナンにおける生活世界、彼らの母国における社会の仕組みがどのようにネパール-マレーシア間で出稼ぎシステムを存続させているのかを解き明かした労作である。そして Yakushiji Hiroyuki: The Value of Craft Products Development for Pro-Poor Tourism Growth in Bhaktapur, Nepal は、精緻なインタビュー調査をもとに、ネパールの地方観光都市バクタプルにおけるローカルな工芸品の観光商品化の取組みについて検討を加え、その実践が地元民の貧困克服のためだけでなく、自立心・自尊心の高揚にも貢献していることを明らかにしている。あわせて、これらの論考についてもご一読いただければ幸いである。

## 注

- 1) 同研究会は、2006～2008年の「貧困の文化と観光」研究会（研究代表者：江口信清、幹事：藤巻正己）の後継研究グループであり、アジア各地でフィールドワークを遂行してきた人文地理学、文化人類学、社会学、経済学などさまざまな学問領域の、学内外の研究者によって組織されている。
- 2) 「エスノスケープ」とは、グローバリゼーションをめぐる議論を、国家という枠組みを超えるグローバルな文化フローについて言及した人類学者のアパデュライ (A. Appadurai) による造語であるが、可視的客観的な「民族景観」という意味だけでなく、フローとしての外国人労働者や観光客、さらには彼らを受入れるホスト社会住民らが相互に交わす眼差し、想像の地理が映し出す心象風景をも含めた概念であると解される（藤巻正己「トランスナショナル都市化するクアラ Lumpur—変貌する熱帯のメトロポリスの民族景観—」立命館地理学19、2007年、1～19頁）。
- 3) 「ツーリズムスケープ」とは、tourism（観光）とscape（景観あるいは風景）との合成語であり、しいて日本語表記すれば「観光景観」となろう。それは、ツーリズムが

生み出す物質的でリアルな土地景観 (physical / real landscape) であると同時に、それらをめぐる行為主体による言説の読み解き、洞察などを通じて幻視される観念的想像的な心象風景 (imagined landscape) をも併せ持った造語であり、概念である (藤巻正己「「マハティールの都市」クアラルンプール—生産されるスペクタクルなツーリズムスケープ—」立命館大学人文科学研究所紀要93、2009年、25～53頁。藤巻正己「ツーリズム [in] マレーシアの心象地理—ツーリズムスケープの政治社会地理学的考察—」立命館大学人文科学研究所紀要95、2010年、31～71頁)。

- 4) 「貧困の文化と観光」研究プロジェクトの成果は『貧困の超克と観光』(江口信清・藤巻正己編著、明石書店、2011年)として公刊されている。